

日本文芸研究ゼミナール(12) : 日本言語学(ゼミナール選抜の手引き : 学習の方法)

著者	数馬 志保, 大島 章子, 間宮 厚司
雑誌名	日本文學誌要
巻	56
ページ	117-118
発行年	1997-07-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019978

さまざまな表現の形と、深層の思想について、見ていくことになる。

授業形式は、取り上げた作品を、いくつかのまとまりで分け、各自が担当し、調査、研究したうえで、個人発表をする。また、それらの発表に基づいて、全員で、討論をおこなう。

取り扱う作品については、授業内で随時指定されることとなるが、本年度取り上げる作品の中で、例を上げると、大庭みな子「浦島草」（講談社文芸文庫）、高橋たか子「誘惑者」（同）、河野多恵子「幼児狩り」「蟹」などがあげられる。

それらの現代文学を、考察すること、近代への問いかけや、セクシャリティの問題、あるいは女性嫌悪や母性嫌悪や家族幻想解体の深層を探ろうとするものである。

以上が本ゼミでおこなっている事柄と、そのねらいである。本ゼミに参加するにあたっては、積極的に作品研究をおこなう姿勢と、活発なる報告、討論をおこなうことが求められる。

参考文献：水田宗子著『ヒロインからヒーローへ——女性の自我を表現』（田畑

書店）、中川成美、長谷川哲編『高橋たか子の風景』（彩流社）、長谷川哲著『佐多稲子論』（オリジン出版センター）

担当教員 長谷川 哲 先生

日本文芸研究ゼミナール(12)

日本語学

委員 三年

数馬 志保
大島 章子

私達のゼミは日本語学について研究するゼミなのですが、日本語に関することならば、音韻、文法、語彙、文体、方言、文学、表記など時代を問わずなんでもOKです。つまり、自分に合ったテーマを個人個人で自由に設定することができのです。授業は演習形式で、前後期1回ずつ自分の研究を先生や他のゼミ生の前でレジュメを配付して発表します。発表といってもあまり堅苦しいものではありません。たとえば研究が不完全なもの

でも論証の過程を重視しているので、自分の頭で考え、自分の言葉で語ることができれば大丈夫です。もちろん、その発表に対するアドバイスやこれからのように研究を進めていったらよいのかなどは、丁寧に指導してまいります。また、研究テーマに行き詰まってしまったら、どんな新しいテーマに変えることができます。「誤りを恐れず、のびのびとやってほしい。」というのが先生のお考えです。研究の成果はテーマの善し悪しで決まるといっても過言ではありません。恋人を選ぶように慎重に探すことをおススメします。私達はその先生の指導のもとに、自分の研究を最終的に卒業論文にまで高めていくのです。学問的な研究のレベルまで達することを目標としています。そのためにも1年の締めくくりとして、学年末に大レポートを書きます。これも卒業論文への大きな一歩です。授業以外の活動としては、コンパやゼミ合宿があります。先生やゼミ生徒の意外な(?)素顔を見ることが出来ます。とにかく、何もかもが自由であるというのが率直な感想です。このように私達のゼミは、

恵まれた環境の中で楽しく、なおかつ自分のやりたいことができるやりがいのあるゼミだと思います。

参考文献

北原保雄ほか著『国語学研究法』（武蔵野書院）

伊坂淳一著『ここからはじまる日本語学』（ひつじ書房）

大野晋著『日本語の文法を考える』（岩波新書）

担当教員 間宮 厚司 先生

日本文芸研究ゼミナール⁽¹³⁾

チョムスキーの言語論に基づく 普遍文法の解析

委員 三年 三室 隆史

当ゼミにおけるねらいは、チョムスキーの言語論に基づき、普遍文法概念を学ぶことである。普遍文法概念とは、すべての人言言語に共通の原理、条件、

規則のまとまった体系を示すもので、いわば人間言語のエッセンスのことである。普遍文法における関心のまとは人間精神の内的構造である。そしてまた、普遍文法は知識の理論である。知識の性質は、それがどのように習得されるかという問題と切り離せない。普遍文法の理論では、この問題について次のように考える。人は日本語であれ英語であれ、およそすべての言語に共通した一連の原理と言語ごとに異った値に設定されるパラメータについて知っている。言語を習得することの意味は、これらの原理がどのようにに特定の言語に適用され、また各パラメータの値をどう設定するのが適切なかを習得することにほかならない。普遍文法の提案する原理はその一つひとつが実質的に話者の精神と言語習得の性質をめぐる主張である。文法と精神、そして学習ということをどの点においても統合しようとするのが普遍文法の特徴である。

当ゼミでは、以上に概略を説明した普遍文法に関する論文（主に英文）を読み、各自が担当する部分に対する解釈及び説

明を、発表するという演習形式をとっている。普遍文法の理論を学ぶには、ある程度の基礎知識が不可欠ではあるが、その点については、サブゼミなどでフォローしている。

参考文献

『チョムスキーの言語理論 普遍文法人門』V・J・クック 新曜社

『日本語の統語構造』三原建一 松柏社

『変形統語論—チョムスキー拡大標準理論解説』ラドフォード 研究社出版

担当教員 佐川 誠義 先生